

ブルガリア・フォークロアにおける 「聖ゲオルギオスの竜退治」の変容

—— キリスト教伝説と民間暦 —— (I)⁽¹⁾

伊 東 一 郎

1. はじめに

筆者はスラヴ民衆世界における聖ゲオルギオス崇拝についての一連の論考〔伊東 1984；伊東 1988；伊東 1994；伊東 2013a；伊東 2013b；伊東 2014〕の中で、スラヴ民衆文化における聖ゲオルギオスのイメージは二つの要素から成り立っていることを指摘してきた。その一つは歴史的に形成された、大殉教者としての聖ゲオルギオスに関するキリスト教伝説であり、もう一つはキリスト教暦において4月23日に定められている聖ゲオルギオス祭の民俗儀礼であり、その日付の民間暦における機能的意義である。本論の目的は、ブルガリア・フォークロアにおいて「聖ゲオルギオスの竜退治」のモチーフが、キリスト教伝説に由来しながら、民間暦における聖ゲオルギオス祭の機能的意義の影響を受けてどのように変容したかを考察し、そのことによって口承文芸学と民俗学の架橋の実例を示すことにある。

2. ミラディノフ兄弟採集の神話的バラード「聖ゲオルギオス」

本論で考察の出発点とするのは、マケドニアの文学者・民俗学者ミラディノフ兄弟（ディミータル [1810-62]、コンスタンチン [1830-62]）が19世紀半ばに主に現在のマケドニア共和国の領域で採集した神話的バラード「聖ゲオルギオス」である。この表題を持つバラードは兄弟の編集した民謡集 [Миладинови 1861] に二つ収められている（No.31, 38）。この二つのバラードはほぼ同じ内容のものであるので、ここでは38番のバラードの内容を対訳によって示す。対訳に際してはシテファン・コチャンチチ [1818-83] のスロヴェニア語訳 [Brata Miladinova 1984] を参照し、原文テキストはトードル・ディミトロフスキ校訂のマケドニア語正書法によるものを用いた [Миладиновци 1983]⁽²⁾。

なおミラディノフ兄弟の民謡集が出版された1861年にはまだ民族概念としてのマケドニアも、独立した南スラヴ語の一つとしてのマケドニア語の概念もなく、ミラディノフ兄弟も出版の際には民謡集の標題を『ブルガリア民謡集』としていた。本論では現在のマケドニアとブルガリアとを共通の文化圏として扱い、それをブルガリアの名称で呼ぶが、これは便宜的な取り扱いであり、筆者が民族としてのマケドニア人、言語としてのマケドニア語の存在を否定している訳ではない。

СВЕТИ ГЕОРГИ

「聖ゲオルギオス」

- 1 Бог да биет краља од Тројана!
Ми пособрал Тројанци христјани:
«Ел' чуете, Тројанци граждани!
Расипите бога единего,
Напишите бога стробренова.»
Написале бога стробренова,
Шчо ми текле у Тројана града
Триесет и три точки студна вода;
Тамо фати да ми протечвит
- 10 Бело стробро и свитлоно злато;
Тоа за бога молиа, тоа ми најдоа.
Ним'и прати краљ тројански
Ми'и прати под Тројана града,
Под езеро, кеј глобок бунар.
Тамо имат таја вода студна;
Тамо имат змиа халовита;
Тамо одат тројански христјани
Да откупат водата со стробро,
- 20 Со стробро, со жежено злато.
Бог да биет краља од Тројана!
Промени негова мила ќерка,
Негова ќерка најмала Мариа;⁽³⁾
И наполни џепје и пазуи
Со стробро и злато жежено;
Во раџе је даде стробрен ибрик:
«Ајти ќерко, мала Марио!
Ти појди ми крај бунара,
Налеи ми она студна вода
- 30 Да откупиш ти вода со стробро.»
А шчо беше девојка Мариа!
Се прекрсти, богу се помоли:

神よ、トロヤンの王を打ちたまえ！
トロヤン王はキリスト教徒を集めた—
「さて聞くがよいトロヤンの町の民よ！
唯一なる神を捨て
銀の神を象るのだ」
そこで町の民は銀の神をかたどった。
トロヤンの町には流れていた
33の泉から冷たい水が—
ところがそこに流れ始めたのだ
白銀と明るい黄金が—
神に祈ったものを民は見出したのだ
そこでトロヤンの王は遣わした
トロヤンの町に遣わした
湖に、深い井戸に。
そこには冷たい水があった
そこには恐ろしい竜がいたが、そこに
トロヤンのキリスト教徒たちは通った
銀で水をあがなうために
銀で、燃える黄金で。
神よ、トロヤンの王を打ちたまえ！
王はその愛しい娘を着飾らせた
末娘のマリアを⁽³⁾
そしてポケットと懐に
銀と熱い黄金を一杯に詰めさせ
その手に銀の水差しを持たせた—
「おお我が娘、若きマリアよ
おまえは井戸へと向かい
冷たい水を汲むのだ
銀で水をあがなうのだ」
そこで乙女マリアはどうしたか！
十字を切ると神に祈った

- «Дејди боже, мене поможи ми!»
 И киниса по бели друмови,
 И си стрете незнаена делја,
 Делиа со коња дориа,
 «Поможи бог, Тројанско девојко!
 Ако бог да, каи ќе ми одиш?»
 «Ја ќе ходам под Тројана града
 40 Да налеам она студна вода.»
 Одговоре незнаен делиа:
 «О! девојко, хубава Марие!
 Тамо имаг змиа халовита,
 Ќе загинеш млада и зелена!
 Ја не сум незнаена делја,
 Туку су си свети Георгиа.
 Ја ќе легнам на твои скутови,
 Малу перче да ми приобидиш;
 Ја сум вреден тебе да откамам.»
 50 Па си слезе од коњо наземи,
 Легна на нејсини скутови.
 Бог да биет змиа халовита!
 Се даде од глобоко езеро
 Сама себе гласови даде:
 «Хејди боже, хејди мили боже!
 На ден имах само једен таин,
 А денеска имам три таини!»
 И шчо беше хубава девојка!
 Ја догледа змиа халовита,
 60 На девојка тешко жаљ ѝ падна,
 Од жалости таја не ми скорна,
 Не скорна светаго Георгиа
 И порона солси по образи;
 Паднаха солси на образо негов,
 Од жалости солси г' изгореха
- 「神よ、私にご加護を！」
 そして白い道を歩みだすと
 途中で見知らぬ若い勇士に出会った
 栗毛の馬に乗った若者に
 「トロヤンの乙女よ、神のご加護を！
 ところでおまえは何処へ行くところなのだ？」
 「私はトロヤンの町に参ります
 冷たい水を汲むために」
 見知らぬ若者は言った—
 「おお、娘よ、麗しのマリアよ！
 あそこには恐ろしい竜がいる
 おまえは若いみ空で死ぬことになる！
 私は見知らぬ若者ではない
 そうではなく聖ゲオルギオスだ
 私はおまえの膝に横になろう
 少し私の髪をなでつけてくれ—
 私はおまえを救うことができる」
 そこで彼は馬から降り
 彼女の膝に頭をあずけた。
 神よ、恐ろしい竜を打ちたまえ！
 竜が深い湖から現れ
 自ら声をあげた—
 「おお愛しき神よ
 これまでは一日一食だったが
 今日是一次に三食が食える！」⁽⁴⁾
 そこで麗しの乙女はどうしたか！
 恐ろしい竜は乙女を見つめた
 乙女は恐ろしく倒れ伏した
 悲しみで起こすことが出来なかった
 聖ゲオルギオスを起こせなかった
 そこで顔に涙を落した
 涙は彼の顔に落ちた
 悲しみの熱い涙が彼を起こした

- И си стана свети Георгиа,
Изговоре на тројанска девојка:
«О! девојко, хубава Марио!
Шчо ми рониш тие дробни солси?»
- 70 Изговоре Тројанска девојка:
«Брату мои, свети Георгиа!
Опули се по бели друмови,
Шчо ми идет хала халетина,
Шчо говорит змиа халовита—
«На ден имах ја по еден таин,
А денеска имам три таина.»
Се опули свети Георгиа,
Ја догледа змиа халовита.
Ал му велит Тројанска девојка:
- 80 «Сега ние, брате, загинахме!»
А шчо беше свети Георгиа!
Се уплаши свети Георгиа,
Па си слезе сам једен господ:
«Аљ ме чуеш, свети Георгиа!
Вели сам едини господ,
А извади стрела од појаса,
Фарли на змиа халовита;
Може и јас на помош дојдам.»
И шчо беше свети Георгиа,
- 90 Па истргна стрела од појаса,
И фрли на змиа халовита,
Ја погоди меѓу црни очи,
И си кутна змиа халовита,
И си јавна коња дориега,
Па велит на Тројанка девојка:
«Оди пред мене, пред коња.»
С себе зеде змиа халовита,
Па ја врза с дробнаго синцира,
- 聖ゲオルギオスは起き上った
トロヤンの乙女に言った—
「おお乙女よ、麗しのマリアよ！
なぜはらはらと涙を落とすのだ？⁽⁵⁾」
トロヤンの乙女は言った
「我が兄弟、聖ゲオルギオスよ！
白い道を見ると
恐ろしい竜が私の方にやって来ました
恐ろしい竜が言うことには—
『一日一食しか食えなかったが
ところが今日は三食だ』」
そこで聖ゲオルギオスが見ると
恐ろしい竜が見えた
だが彼にトロヤンの乙女が言った
「もう、兄弟よ、私たちはおしまいです！」
そこで聖ゲオルギオスはどうしたか！
そこで聖ゲオルギオスが見ると
そこに唯一なる神が降臨し—
「私の言葉を聞け、聖ゲオルギオスよ！
唯一なる神がおまえに話しているのだ
腰から矢を抜くのだ
恐ろしい竜に投げるのだ
私も助けに駆けつけようぞ」
そこで聖ゲオルギオスはどうしたか
すぐさま腰から矢を抜き取り
それを恐ろしい竜に投げると
両の黒目の間にそれが当たった
恐ろしい竜は倒れ伏した
そして聖ゲオルギオスは栗毛の馬に乗り
そしてトロヤンの娘に言った—
「私の前に、馬の前に来い」
聖ゲオルギオスは恐ろしい竜を取り押さえ
その竜を細い鎖に繋いだ

- И велит свети Георги на коња :
- 100 «Али чуеш, коње дорие,
 Си фатихме змиа халовита,
 Влечи, коње, сега да се влечи.»
 И киниса по бели друмои.
 Кога дојде у Тројана града,
 Кога гледат Тројанци христијани,
 Ги прифати треска тригодишна.
 «Ејди, боже, сполај ми ти тебе!
 Од кога се Тројан заградило,
 Ваква хала не беше ни дошла!»
- 110 Па си ходит свети Георгиа,
 Па си ходит по Тројана града,
 Па си слезе од коња наземи,
 И си праќа девојка Мариа:
 «О! девојко, хубаво Марио!
 Ти да појдиш у ваши дворје,
 Хабер ти стори на твои татко.»
 Си отиде на свои дворови,
 Па говори она на татка си:
 «Аљ ме чуеш, мои стари татко!
- 120 Дојде еден незнаен делиа,
 И те викат тој каи него»
 Па киниса тои краљ Латин,
 Па отиде кај свети Георгиа:
 «Добредојде, незнаен делиа!»
 «Добре најдох, крале Латинине!»—
 «Ако сакаш ја да ми ти даам,
 Да ти даам моја мила ќерка!»
 Изговори свети Георгиа
 На онега краља Латинего:
- 130 «Ќути, Латин, уста да ти капнит,
 Не зборувај ти такви речови!
- そして馬に言った—
 「さて聞くのだ、栗毛の馬よ
 吾らは恐ろしい竜を取り押さえた
 馬よ、これからこの竜を曳いて行くのだ」
 そして白い道を歩みだした
 彼がトロヤンの町に来たのを
 トロヤンのキリスト教徒が見ると
 彼らはひどく恐れ戦いた
 「神よ、汝に栄光あれ！
 トロヤンの町が築かれてこのかた
 このような竜がやって来たことはない！」
 そこで聖ゲオルギオスは歩んだ
 トロヤンの町へと歩んだ
 それから馬から地上に降り
 娘マリアを遣わした
 「おお乙女よ、麗しのマリア！
 おまえはおまえたちの宮殿へ行き
 おまえの父に知らせるのだ」
 そこでマリアは自分の宮殿へ行き
 そして自分の父に言った
 「老いた我が父上、私の話をお聞きなさい！
 一人の見知らぬ若者がやってきて
 あなたに彼のもとへ来るように言うのです」
 そこでそのラテン王は歩み
 聖ゲオルギオスのもとへやって来た
 「ようこそいらした、見知らぬ若者よ」
 「御機嫌よう、ラテンの王よ」
 「もし望むならあなたに差し上げよう
 私の愛しい娘を差し上げよう」⁽⁶⁾
 聖ゲオルギオスは言った
 そのラテンの王に言った
 「黙れ、ラテンの王、口を閉じよ
 愚かなことを言うではない！

- | | |
|--|---|
| <p> Ja не сум ти некои делиа,
 Туку ја сум еден ангел божи,
 Ангел божи свети Георгиа.
 Али гледаш хала халетина!
 Да собериш Тројанци христјани,
 Да расипиш бога стробренаго,
 Да напишиш бога единого,
 Оти гледаш страшна халетина.
 140 Ако пуштам змиа халетина,
 Три пати градо ќе преопалит,
 Жива душа од нас не остават.»
 Изговоре тои краль Лагин:
 «Прости мене, свети Георгиа!»
 Се собраха христјани Тројанци,
 Расипаха бога стробренаго,
 Напраиха бога единого.
 И што текле трисет и три чешми
 Чисто стробро и жежено злато,
 150 Пресекнаха и ми протекоха,
 Протекоха таја студна вода.
 Од тогај песна останала. </p> | <p> 私は見知らぬ若者ではない
 そうではなく私は神の天使
 神の天使、聖ゲオルギオスだ
 恐ろしい竜を見たのか！
 トロヤンのキリスト教徒を集めて
 銀の神を捨て
 唯一なる神を崇めるのだ
 恐ろしい竜が見えるだろう
 もしも恐ろしい竜を放てば
 竜は三度この町を焼きつくすぞ
 生きた者は一人も残らぬぞ」
 そこでラテンの王は言った—
 「許してくれ、聖ゲオルギオスよ！」
 トロヤンのキリスト教徒は集まり
 銀の神を捨て
 唯一の神を象った
 すると33の泉は
 純銀と熱い金が流れていた泉は
 干上がり、流れ出した—
 冷たい水が流れ始めた
 そこでこの歌ができたのだ
 [ミラдиновци 1981: №38] </p> |
|--|---|

3. キリスト教伝説における聖ゲオルギオス

以上紹介したマケドニアの神話的バラードは、言うまでもなく聖ゲオルギオスの竜退治を語るキリスト教伝説に由来している。その内容については前稿 [伊東 1984; 伊東 1988; 伊東 1994; 伊東 2013a; 伊東 2013b; 伊東 2014] において繰り返し紹介しているので詳細はそちらに譲るが、二つの部分から構成されている聖ゲオルギオス伝説の後半部分を成している。その一つは最初に成立したと考えられる殉教伝説、第二の竜退治伝説は後におそらく民衆的基盤によって成立しそれに付加されたと考えられる。

13世紀に編まれたヤコブス・デ・ヴォラギネの『黄金伝説』によれば聖ゲオルギオスはカッパドキア出身のローマの兵士で、キリスト教徒大迫害時代の際にキリスト教に帰依し度重なる拷問にも耐え303年頃斬首されて殉教したとされる。この殉教伝説はロシアの巡礼霊歌やベラルーシ

の巡礼歌にもモチーフとして知られているが〔伊東 2013a；伊東 2014〕、マケドニアおよびブルガリア・フォークロアには筆者の知る限り知られていない。

次に我々に馴染み深い竜退治の伝説は11世紀に付加されたものらしく、『黄金伝説』によれば、その内容は次のようなものである。あるとき、リビアのシレナという町に湖に毒を持った竜が住み付き、その毒気で町に悪疫をはやらせた。そこでこの竜をなだめるために、市民たちは毎日二頭の羊を与えていたが、羊の数が足りなくなって、毎日人間一人を竜に捧げるようになった。生贄となる人間は籤で選ばれていたが、とうとう王の一人娘に籤があたり生贄にされようとした時、たまたまそこへ聖ゲオルギオスが馬で通りかかり、娘を救った。聖ゲオルギオスは住民が洗礼を受けることを条件にこの竜を殺した。二万人の人々が洗礼を受け、国王は聖母マリアと聖ゲオルギオスのために教会を建てた。すると祭壇から清水が噴き出して、その水を飲んだすべての病人たちは、たちまち健康になった〔ヤコブス・デ・ヴォラギネ 1984: 80-84〕。

この聖ゲオルギオスの竜退治伝説は、遅くとも13世紀後半にはギリシア語から教会スラヴ語に翻訳されて、ブルガリア、マケドニアを含む南スラヴに知られていた〔Стойкова 2012: 255〕。

この聖ゲオルギオスの竜退治伝説は、明らかにフォークロア的な話型（アアルネートンプソンの話型300番）をもとに、民間の熱烈な聖ゲオルギオス崇拝を基礎に成立したものであろう。そしてブルガリアのフォークロアにおいて、聖ゲオルギオスの竜退治のモチーフはこのような神話的バラードのみならず民間暦に歌われる儀礼歌にまで見出すことができる。

このことはアイコンと呼ばれる東方正教会の聖者像にもいえることである。東方正教会の聖ゲオルギオスのアイコンには二つの構図がある。それはキリスト教伝説の二つの層に対応しており、一つはより古い、片手に槍を持つ兵士の立像としての聖ゲオルギオス像であり、もうひとつは本論で扱っている、より新しい、竜と戦う騎馬の聖ゲオルギオス像である。しかしブルガリアにおいては、後者の構図が圧倒的に優勢である⁽⁷⁾。これは竜と戦う騎士としての聖ゲオルギオスのイメージが、特に14世紀以降のオスマン帝国のバルカン半島侵入以後きわめて強烈に印象づけられたためであろう。ブルガリアの民間伝承における聖ゲオルギオス伝説がもっぱらこの竜退治伝説に限られていることには、民衆にとってきわめて親しいものであったこのアイコンのイメージの影響を考えないわけにはゆかないのである。

因みにブルガリア及びギリシア、コプトの聖ゲオルギオスの竜退治のアイコンにのみ見られる特徴的なディテールについて触れておこう。それは、竜と闘う聖ゲオルギオスの背後の馬上に水差しを持った一人の少年が乗っているという構図である。これはトルコ人に息子をさらわれた両親の祈りにこたえて、聖ゲオルギオスが自分の祝日である4月23日にこの少年を自分の馬に乗せて両親のもとに送り届けた、という別の伝説をこの竜退治の構図の中に描きこんだものである（ブルガリア・アイコンの作例は〔Прашков 1985: №50, №97, №102〕）。この構図の場合、退治される竜が異教のイスラム教徒を象徴していることは容易に想像出来る。

さて本稿で最初に紹介したマケドニアの神話的バラードを以上のキリスト教伝説と比較してみよう。対訳で示したマケドニアの神話的バラードの梗概は次のようなものであった—

トロヤンの町の住民は唯一の神を捨て、金銀を崇拜する異教徒となり、彼らは望みの金銀を与えられた代わりにトロヤンの町では水が干上がってしまう。新しい水源が出現したものの、そこに竜が住み付き、市民は竜に金銀を差し出す代わりに水を与えて貰わねばならなくなる。トロヤンの王は王女マリアを水を貰うために竜のもとに行かせるが、その前に現われた聖ゲオルギオスが竜を調伏し、トロヤンの町の住民に再び唯一の神への信仰を取り戻させる。

これをヴォラギネの『黄金伝説』に収録されたキリスト教伝説と比較すると、ここでの聖ゲオルギオスにおいては、水の解放者・授与者としての役割が拡大していることが分かる。ヴォラギネの伝える説話では、竜は悪疫をふりまく存在ではあっても、唯一の水源の支配者ではない。ここでは聖ゲオルギオスは娘を解放するのみならず、水をも解放しているのである。ここには後に見るようにブルガリアの聖ゲオルギオス祭において水の解放者・水の授与者としてイメージされる聖ゲオルギオス像が影響を与えている可能性があるのである。

またこのミラディノフ兄弟採集のバラードをロシアおよびベラルーシで採集された聖ゲオルギオスの竜退治を扱った巡礼霊歌と比較すると、そこでは竜は水源の支配者では全くなく、その出現場所としての湖さえも言及されていない [伊東 2013a; 伊東 2013b; 伊東 2014]。

4. 聖ゲオルギオス祭と水

4月23日に祝われるブルガリアの聖ゲオルギオス祭の民間儀礼と俗信は大きく牧畜に関わるものと農耕に関わるものとに分けられるが [Колева 1981]、後者において中心的位置を占めるものが水に関するものである。西部ブルガリアでは、この日の朝に下半身裸になった女性が、朝露の下りた野原を転げまわる習慣があり、このことによって不妊その他の病気がなると信じられた。またこの日に初めて川や泉で水浴する風習も広く見られた [伊東 1988: 226-227]。

聖ゲオルギオスはまた民間では雨をもたらす聖者であった。バルカン地方一帯、さらに地中海沿岸地域一般の気候は、夏の乾季と冬の雨季の交代によって特徴づけられるいわゆる「地中海型」であり、実際にこのころの収穫にとって雨は不可欠なものであった。ブルガリアには「ゲオルギオスの雨は値千金」«Гергьовският дъжд алтън струва» という諺があるほどである [Колева 1981: 147]。またこの頃にバルカン地方からコーカサスにかけてペペルーダあるいはドドラと呼ばれる雨乞い儀礼が行われることは注目に値する [伊東 1981]。西北マケドニアのテトヴォ地方では、この儀礼は聖ゲオルギオス祭と復活祭の間の日曜日に行われ、雨の観念と聖ゲオルギオス祭との結びつきを示している [伊東 1981: 71]。

このことを念頭に置くと、聖ゲオルギオスの竜退治のキリスト教伝説そのものが、伝説成立時の11世紀にカッパドキアのギリシア人の民間で既に行われていた可能性のある春の聖ゲオルギオ

ス祭の儀礼の影響を受けていたのではないか、という推測も成り立つのである。

このことに関連してここに紹介しておきたいのは、前ゾロアスター期の古代ペルシアで春分の日に行われていた新年儀礼である。これは古代インドの同様の儀礼との比較考察を基にヴィデングレンが復元したもので、彼によれば次のように一定のシナリオに基づいた演劇的パフォーマンスとして王自身によって行われた。(右のカッコ内は儀礼の象徴的意味)

- | | | | |
|---|-----------|---------------|-------------------------|
| 1 | 竜の支配 | (旱魃) | |
| 2 | 竜に対する勝利 | (要塞の奪取) | |
| 3 | 囚われの乙女の解放 | (堰き止められた水の解放) | |
| 4 | 聖婚 | (降雨) | [Widengren 1965: 41-49] |

興味深いことに、この儀礼の進行は聖ゲオルギオスの竜退治伝説と正確に一致するだけでなく、その儀礼の核心は春の降雨儀礼である。この竜退治伝説の神話的プロットと古代ペルシアの新年祭の儀礼との相似は、小アジアとペルシアの地理的隣接という条件を考慮するにしても、歴史的に関連あるものとして説明することは困難だが、4月23日に定められた聖ゲオルギオス祭が春分の日に定められた古代ペルシアの新年祭と民間暦上の機能が一致するために生じたものと考えられることはできるだろう⁽⁸⁾。その場合古代ペルシアの儀礼を参照するならば、キリスト教伝説においても竜には本来「水の支配者」としての神話的意味があったのではないかと考えられる。つまりキリスト教伝説において「湖のそばに住み着いた」竜のイメージも本来は水源の支配者のそれだったのではないだろうか。それは次に検討する、このバラードの現代ブルガリアでのヴァリエーションによっても示唆されるのである。

5. 水と竜—現代ブルガリアのヴァリエーション

19世紀半ばにミラディノフ兄弟が収集したこのバラードのヴァリエーションは1世紀後のブルガリアにおいても各地で採録されている⁽⁹⁾。次のテキストはピリン・マケドニアのサンダンスコ地方で1978年にブルガリアの輪舞であるホロの歌として採録されたものである。

Свети Георги убива ламя

「聖ゲオルギオスの竜退治」

- | | | |
|---|---|--------------------------------|
| 1 | Три години дож не завърнало,
Сè върнало, мори, град и слана. | 三年も雨は降らなかった
雨は降らずに雹が降り霜が降りた |
| 5 | Сички води, мори, престанали.
Юв ливаде ёзере станало, | 水が何所にも無くなった
草原に湖が現れたが |

- Юв èзере ламя гушерїца,
 На ден тєра по една девойка.
 10 Сички са се редом изредили.
 Ред е дошло троянски войвода,
 Он да прати свое милно чедо,
 Свое чедо — убава Мария
 Она д'иде лãмня да а яде.
 15 Отговори троянски войвода,
 — Е Марийо, убава Марийо,
 Ке си станеш сутрина ме рано,
 Ке облèчеш убава премена,
 Нã со шчо та най прилега —
 20 Средно руо велиденцко.
 Ке си идеш лãмня да те яде.
 Станãла е убава Мария,
 Премени се Мара, нареди се
 Най со шчо я най прилега.
 25 Не ойдèла лãмня да я яде,
 Ойдèла е на тоз «Свети Ѓьорги»,
 Па трьгнãла лãмня да я яде.
 Айде, айде, на среди на пакьо —
 Я отдолу незнайна делия!
 30 На Мария вели и говори:
 — Èла тука, убава Марийо,
 Èла тука под дебела сенка,
 Да ти легна на тенките скути,
 Да попоиш русата ми глава!
 35 Кат ке дойде лãмня гушерїца,
 Ти тогава мене да събудиш.
 Яз тогава лãмня ке убòда.
 И ойдèла убава Мария,
 Легнãл ѝ е на тенките скути,
 40 Още легнã, море, и си заспа.
- その湖には恐ろしい竜が住みついた
 毎日一人の娘を食うのだった
 町の者は皆籤を引いた
 籤はトロヤンの町の司令官に当たった
 司令官は自分の愛し子を遣わした
 我が子である麗しのマリヤを。
 そこでマリヤは竜の餌食になるために出掛けた
 トロヤンの司令官は言った
 「おお、マリアよ、麗しのマリアよ
 明日朝早く起きるのだ
 奇麗な着物を着るのだ
 一番似合う服を着て行くのだ
 復活祭の羊毛の服を着て
 お前が行けば竜がおまえを食らうだろう」
 麗しのマリヤは起きた
 着物を着て着飾った
 一番似合う着物で。
 マリヤは竜の餌食になるためではなく
 かの「聖ゲオルギオス」のもとに向かった
 すると竜がマリヤを食べに出てきた
 さあ、道の真ん中に出てきた—
 すると見知らぬ若者があらわれた！
 聖ゲオルギオスはマリヤに言った—
 「ここに来るのだ、麗しのマリヤよ
 この涼しい木陰に来るのだ
 おまえのたおやかな膝枕に寝かせてくれ
 私の亜麻色の髪をなでつけてくれ
 忌わしい竜がやって来たら
 その時私を起こすのだ
 そうしたら竜を刺し殺そう」
 するとマリヤは彼のもとへ行って
 聖ゲオルギオスは彼女の膝を枕にして
 そのまま横になり寝入ってしまった

- Я отдолу ламня гущерйца,
 Ка си иде, лепа песна пее:
 — Ой ле Боже, Боже, мили Боже,
 На ден беше, Боже, по йдин тайн,
 45 Сега ми са, Боже, три тайна:
 Първи тайн — убава Мария,
 Втори тайн — тове добър юнак,
 Трети тайн — вранята му коня.
 Като чула убава Мария,
 50 Заронила тия дробни сълзи.
 Падна сълза, море, на лицето,
 Трепна юнак, море, разбуди се.
 На Мария вели, ем говори:
 — È Марие, убава Марие!
 55 Я ми подай тежка боздугана,
 Да ударя ламя гущерйца!
 Подаде му тежка боздугана
 Та удари ламня гущерйца,
 Та я навре девет педи в зема.
 60 Отговори убава Марие,
 — Варай, варай, незнайна делийо,
 Дали искаш брата да те фана,
 Или искаш любом да те любя?
 Отговоря незнайна делия:
 65 — È Марие, убава Марие,
 Язе не съм незнайна делия,
 Язе си съм тове свети Гьорги.
- すると忌まわしい竜が這い上がり
 近づきながらきれいな歌を歌うのだ—
 「おお神よ、愛しき神よ
 今日までは一日一食だったが
 今日、神よ、三食食べる—
 最初は麗しのマリヤを
 二食目は美丈夫の若者を
 三食目はその黒馬だ」
 それを聞くと麗しのマリヤは
 はらはらと涙を流した
 涙は聖ゲオルギオスの顔に落ちた
 若者は震え、目覚めた
 マリヤに向かって言った—
 「おおマリヤよ、麗しのマリヤ！
 私に重い棍棒をくれ
 忌まわしき竜をうちのめすために」
 マリヤが重い棍棒を彼に渡すと
 聖ゲオルギオスは忌まわしい竜を打った
 そして竜を地中に9ブードもめり込ませた
 麗しのマリヤは言った
 「教えてください、見知らぬ若者よ
 あなたを慕う兄をお探し？
 それともあなたを愛する娘をお探し？」
 見知らぬ若者が言った
 「おおマリヤよ、麗しのマリヤ
 私は見知らぬ若者などではない
 私のはかの聖ゲオルギオスだ」
 [Живков 1993: №523]

このヴァリエーションのプロットの展開は、ミラディノフ兄弟の採集したものと基本的には同じだが、ミラディノフ兄弟採集のヴァリエーションのように金銀を神と崇めるトロヤンの異教徒がそのために水に事欠くことになる、という道徳的動機付けはなく、最後の町の住民のキリスト教への復帰というモチーフも欠落している。しかしここでは3年続いた旱魃の後に水源の支配者として竜

が登場し、水を解放する聖ゲオルギオスのイメージがミラディノフ兄弟のヴァリエントよりも更に鮮明に現われている。

別の聖ゲオルギオスの竜退治を扱った現代ブルガリアの神話的バラードでは、ミラディノフ兄弟採集の神話的バラードと同様、異教を奉じたためにトロヤンの町を早魃が襲う、という状況下、唯一の水源の支配者である竜が登場する [Живков 1993: №525]。

ところでこのような早魃と竜との象徴的な結びつき、水の支配者としての竜のイメージは、ブルガリアに知られている降雨儀礼「蛇追い」«гонене змей»と明白な関連がある。これは雨乞いのためにペペルーダの儀礼を行っても効き目がないほどの強い早魃の際に行われるものである。強い早魃は肥沃を封じる悪しき蛇の仕業とみなされ、肥沃を回復するためにはこの蛇を追い出し、打ち殺さねばならなかったのである [Маринов 1981: 739-741; Арнаудов 1971: 199-202; Иванов и Топоров 1974: 116]。

一般的に竜と水の間には日本の竜神などを想起するまでもなく、神話学的に普遍的な結びつきがあるが [Иванов 1980]⁽¹⁰⁾、この聖ゲオルギオスの竜退治伝説を扱ったブルガリアの神話的バラードの本質は、一般的な水と竜との神話学的関連と、4月23日にその祭日を持ち、水を実際にもたらすと信じられた聖ゲオルギオスと水とのメトニミックな連想との複合による竜—水—聖ゲオルギオス三者の観念連合にあると考えられるのである。

このことに関連して興味深いのは、ブルガリアの神話的バラード「聖ゲオルギオスの竜退治」がしばしば、コレダ（クリスマス・イヴに歌われる豊作の予祝の歌）として歌われる、ということである。これはブルガリアではこの主題のバラードがまさに古代ペルシアの新年儀礼と同じく、雨をもたらす春の予祝の歌と感受されていたことを示しているからである。

注

- (1) 本論は1986年にソフィアで開催された第2回国際ブルガリア学会議で発表したロシア語の報告 [Ito 1987] に基づいている。重なり合う内容の英文の報告 [Ito 1987]、日本語論文 [伊東 1988] もあるが、そちらが儀礼に焦点を当てたものであるのに対して、本稿は聖ゲオルギオスの竜退治をモチーフとするフォークロアのテキスト分析に焦点を当てて大幅に改稿増補したものである。なお本稿は(Ⅱ)で完結する。
- (2) ミラディノフ兄弟の民謡集は、1861年にザグレブで19世紀のブルガリア語旧正字法により出版されたもので、その際は標題も『ブルガリア民謡集』だった [Миладинови 1861]。しかしミラディノフ兄弟が採集した民謡は、主に現在のマケドニア共和国の領域で採集されたもので、ブルガリアではブルガリア民謡として扱われているが、マケドニアではマケドニア民謡として扱われていることを注記しておく。
- (3) 本来のキリスト教伝説においてこの竜の餌食となろうとする娘の名は固有名で呼ばれていない。ロシアの巡礼霊歌では、エリザヴェータという名で呼ばれ、ノヴゴロドの14世紀のイコンにはこの名が書き込まれている [伊東 2013b]。ブルガリアのイコンにこのバラードの影響によって王女の名をマリヤと書き込んだものを、筆者はまだ知らない。
- (4) それまでは一日一食しか食べられなかったのが、今回は娘と馬とゲオルギオスを同時に獲物にして、いつもの三倍食べられる、と囁くモチーフはロシアの聖ゲオルギオスの巡礼霊歌にも見出せる [伊東 2013a; 伊東 2013b; 伊東 2014]。

- (5) 聖ゲオルギオスが乙女の膝で眠りに落ち、聖ゲオルギオスをどうしても起こせない乙女が涙を流し、顔に落ちたその熱い涙で聖ゲオルギオスが目覚める、というモチーフは同じ聖ゲオルギオスの竜退治を主題とするロシアの巡礼霊歌にも同じように見られる [伊東 2013a; 伊東 2013b; 伊東 2014]。このモチーフはロシアの魔法昔話にも知られ、「勇士の眠り」と呼ばれている [Пропп 1946: 203, 252-253; Блопп 1983: 226, 276]。
- (6) 助けられた娘と聖ゲオルギオスの結婚をラテンの王が提案するこのモチーフは聖者伝にはなく、むしろ聖婚と降雨で終わる古代ペルシアの新年儀礼を想起させる (第4節参照)。
- (7) これはクレムリンに聖ゲオルギオスの竜退治のアイコンが一点もない、という事実と対照的である。Блоппによれば聖ゲオルギオスの竜退治伝説を異端とみなしていた教会権力者の注文でアイコンを描いたため、Андрей・ルブリョフの作品に聖ゲオルギオスの竜退治のアイコンは一点もない [Пропп 1973]。
- (8) 竜を雷神が打ち破るというプロットで演じられる新年祭の神話的儀礼のプロットは古代ヒッタイトにも知られていた。因みに竜退治が降雨をもたらすというプロットは、イワーノフとトポロフが再建したスラヴ祖語時代のスラヴ神話のプロットと部分的に一致する [Иванов и Топоров 1974: 118]。彼らが再建した「基本神話」では雷神ペルーンが竜形の神ヴェーレスを打ち破り、雨をもたらす。彼らによればこれは同時に新年に行われる神話的儀礼であった。イワーノフとトポロフは更に東スラヴの異教神ヤリーロがペルーンと関連し、ヤリーロのイメージは音韻論的類似によって聖ゲオルギオスに習合した、としている。これについては [栗原 1996] 参照。
- (9) そのヴァリエーションの一覧は [Живков 1993: 560] 参照。
- (10) 西欧の竜 (Dragon) がふつう水神的性格を欠くのに対して、アジア、アフリカ、アメリカの竜は多くの場合水神的性格を持つ。このことをブルガリアにおける水源の支配者としての竜のイメージと比較することは有益であろう。

文献

- Антиќ**, Вера 1976: Хагиографијата за св. Ѓорѓи и мегданот со ламјата. — Антиќ, Вера. Од средновековната книжевност. Скопје: Македонска книга, 128-147.
- Арнаудов**, Михаил 1971: Студии върху българските обреди и легенди. 1.София: Издателство на Българската академия на науките.
- Бессонов**, Петр 1862: Калекы перехожие: Сборник стихов и исследование П.Бессонова. Вып.2. Москва: Типография А. Семена.
- Живков**, Тодор (отг.ред.) 1993: Български народни балади и песни с митически и легендарни мотиви (Сборник за народни умотворения и народопис. Книга LX. Част 1.). София: Издателство на Българската академия на науките.
- Иванов**, Вячеслав 1980: Змей. — Токарев, Сергей (гл.ред.) Мифы народов мира. I. Москва: Изд. «Советская энциклопедия», 468-471.
- Иванов**, Вячеслав и **Топоров**, Владимир 1974: Исследования в области славянских древностей. Москва: Издательство «Наука».
- Ито**, Ичиро 1987: Преображение Святого Георгия в болгарском народном сознании. Втори Международен конгрес по българистика. Доклади. Т.10. Етнография. София: Издателство на Българската академия на науките, 31-36.
- Колева**, Татяна 1981: Гергьовден у южните славяни. София: Издателство на Българската академия на науките.
- Маринов**, Димитър 1981. (1914): Народна вяра и религиозни народни обичаи. София: Издателство «Наука и изкуство».
- Миладинови**, Димитър и Константин 1861: Български народни песни. Загреб: Книгопечатница на А.Ягича. (переиздание: 1961 София: Български писател)
- Миладиновци**, Димитрија и Константин 1983: Зборник на народни песни. Скопје: Македонска книга.
- Прашков**, Любен 1985: Български икони. София: Държавно издателство «Септември».

- Пропп**, Владимир 1946: Исторические корни волшебной сказки. Ленинград: Издательство Ленинградского университета.
- ブロップ、ウラジーミル** 1983: 『魔法昔話の起源』 齊藤君子訳 せりか書房
- Пропп**, Владимир 1973: Змеборство в свете фольклора. — Путилов, Б., Чистов, К. (отв. ред.) Фольклор и этнография русского Севера. Ленинград: Издательство «Наука». Ленинградское отделение, 190-208.
- Путилов**, Борис 1968: Русские и южнославянские песни о змеборстве. — Русский фольклор. XI, 31-54.
- Стойкова**, Ана 2012: Аджарска следа в чудото на Св. Георги със змея? — Мирjana Детелић, Лидија Делић. (уредн.) Гује и јакепи. Књижевност, култура. Београд: Балканолошки институт Српске академије наука и уметности, 255-267.
- Brata Miladinovi** 1984: Ljudske pesmi v slovensem prevodu Štefana Kociančiča. Ljubljana: Goriški muzej Nova Gorica. Народен музеј Струга. Univerza Kardelja v Ljubljani. Znanstveni inštitut Filozofske fakultete.
- Ito**, Ichiro 1987: Transformation of St. George in folk consciousness: from field interview in a Bulgarian village of Novakovo. — Tani, Y. and Sakamoto, S. (ed.) Domesticated Plants and Animals of the Southwest Eurasian Agro-Pastoral Culture Complex. II. Pastoralism. Kyoto: The Research Institute for Humanistic Studies, Kyoto University, 69-82.
- Якобус・デ・ヴォラGINE** 1984: 『黄金伝説』 2. 前田敬作・山口裕訳 人文書院 (Jakobus de Voragine, „Legenda Aurea“)
- Widengren**, Geo 1965: Die Religionen Irans. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag.
- 伊東一郎** 1981: 「バルカンにおける降雨儀礼と儀礼歌—ドドラあるいはベペルター—」 『季刊人類学』 12巻2号、59-103.
- 伊東一郎** 1984: 「ブルガリアのパステルナーク」 『えうゐ』 13号、1-10.
- 伊東一郎** 1988: 「聖ゲオルギウスの変容—ブルガリアの伝承と儀礼より」
青木保・黒田悦子編 『儀礼—文化と形式的行動』 東京大学出版会、214-236.
- 伊東一郎** 1994: 「スラヴ民衆文化における聖ゲオルギウス—アイコン・儀礼・フォークロア」 聖心女子大学キリスト教研究所編 『東欧・ロシア—文明の回廊』 春秋社、97-113.
- 伊東一郎** 2013a: 「ロシアにおける「聖ゲオルギオスの竜退治」伝説—巡礼霊歌・アイコン・聖者伝 (I)」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 58輯第2分冊、91-105.
- 伊東一郎** 2013b: 「巡礼霊歌からアイコンへ—ロシアにおける「聖ゲオルギオスと竜」伝説—」 伊東一郎・蔵持不三也・松平俊久 『ヨーロッパ民衆文化の想像力—民話・叙事詩・祝祭・造形表現』 言叢社、29-77.
- 伊東一郎** 2014: 「ロシアにおける「聖ゲオルギオスの竜退治」伝説—巡礼霊歌・アイコン・聖者伝 (II)」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 59輯第2分冊、71-84.
- 栗原成郎** 1996: 「狼の牧者—異教神ヤリ—ロから聖ゲオルギイへ—」 栗原成郎 『ロシア民俗夜話 忘れられた古き神々を求めて』 丸善 丸善ライブラリー700、93-137.
- 谷泰** 1984: 『聖書』世界の構成論理』 岩波書店。